「君君たり、臣臣たり」

「日曜寸言」　041219

不殺生戒とは、すべての生あるものを殺してはならないという仏教の戒律である。これは、姦淫を禁じた不淫戒、盗むことを戒めた不盗戒、悟りを開いたと嘘をいうことを許さない不妄語戒と並んで仏教世界で最高の罪である。

困ったことに、X君とき殺生が大好き。春三月、東風吹いて水がぬるむ頃になると、残雪の深山に分け入って、渓流の岩魚をねらって岩陰から釣り糸を垂れる。蛍の飛び交う雨の季節ともなれば、あちらの川、こちらの大河と、V12エンジンの愛車に友鮎を乗せて鮎釣りに余念がない。

彼は、脳卒中で倒れたことがある。死出の旅の途次、三途の川までやってきた。ズボンをたくしあげ、やおら水に入って見れば、赤、青、黄、色とりどりの魚たちが水中に群舞している。急ぐ旅でもなし、今生の釣りおさめにここで川釣りを楽しんで行こう、と彼は考えた。

もと来た此岸に戻って釣り糸を垂れてみると釣れるわ、つれるわ。生前には経験したことのない大漁だ。陽が西方浄土に沈む刻まで釣りに夢中になっていると、行きつけのクラブのママが迎えに来た。「Xさん、彼岸には未だ行かないでぇ」と鼻にかかったなつかしい声。その声に促され、釣竿だけ持って彼女のマンションに戻った。気がついたら病院のベッドの上だったそうだ。以来、殺生禁断どころか、殺生は命を救う、というのが彼の持論となった。

実はそうではない。彼には釣りの才能がないのだ。無いからか許されていて家人に渡す釣果はすべて川岸で買った友鮎の変わり果てた遺体だ。

困ったことに、秋になると彼は狩猟もやる。そのハンターの雄姿はウィリアム＝テルばりの猟犬ポインターの狩猟に同行する。狩猟仲間が山中で出会うと、彼に対してよりもジョンの方に敬意を表して通り過ぎるぐらいなのである。

今やそのジョンは、猟場に行っても雉子や猪を追い出すことはしない。それもそのはず、これまでに何十回となく、否でも応でも命中するだろう方角に獲物を追い出してやっていたのに、ただの一度も捕獲したためしがない。気の毒に周りの樹木が散弾銃に撃たれて大怪我をする。これほど仕えがいのない無能な主人もいないが、自分だけは「臣臣たり」とジョンは確信している。

あろうことか、そのX君が最近、村長選挙に当選したという。ジョン同様、役場の優秀な職員たちは冬眠に入るだろう。気の毒に、要領の悪い連中が彼の罵声に遭って傷つく。やっぱり、殺生戒は厳守されるべき戒律なのだ。